

## 「かながわ人づくりコラボ2025」の実施結果の概要

### 1 開催の趣旨

かながわ教育ビジョンについて県民の方々と共感と共有を図り、様々な主体との協働・連携による人づくりをより一層推進するとともに、より実効性のある教育施策の実現に資するため、かながわ教育ビジョン第6章に基づき、かながわ教育月間に合わせて開催するもの。

### 2 開催の状況

- (1) 開催形態 会場開催とオンライン配信を併用して開催
- (2) 日 時 令和7年10月25日（土）14：00～16：00
- (3) 場 所 県立総合教育センター 講堂
- (4) テーマ 先生の働き方、進化中！？～子どもたちの未来に向けて～
- (5) 参加者 【会場】176名 【オンライン】532名 【アーカイブ】658名※  
【計】1,366名

(※ イベント終了後1ヵ月間のアーカイブ配信の視聴回数)

### 3 開催の内容

#### (1) オープニングアトラクション

県新人大会テーマ部門優勝作品の「<sup>あ</sup>な<sup>な</sup>たへ」、全日本高校・大学ダンスフェスティバル（神戸）入選作品の「翔ぶクジャク」の2つを披露した。

途中、部員からそれぞれの作品に込められた想いや、作品のイメージについて説明があった。

また、部活動の紹介や、日ごろの練習の様子を披露した。



#### (2) 開会挨拶（神奈川県教育委員会 教育長 花田忠雄） 【ビデオメッセージ】

開会の挨拶として、「かながわ教育ビジョン」の理念に基づく取組、県民との教育論議の機会である本コラボの趣旨とテーマ設定の視点について話があった。



#### (3) 実践紹介

県立高校における教員の働き方改革に関する取組として、ICT・DX関連の取組（多摩高校、横浜翠嵐高校）、オフィス環境改善の取組（生田高校）、外部人材活用の取組（小田原東高校、愛川高校、七里ガ浜高校）をまとめた動画を上映した。



#### (4) 教育論議

現場で進められている働き方改革の取組を共有した上で、多様な視点から、課題等の解決に向けた議論がなされた。

◇コーディネーター：坂野 慎二 氏（玉川大学 教育学部 教授）

◇パネリスト 石井 薫 氏（大井町立大井小学校 総括教諭）

近藤 洋介 氏（平塚市立浜岳中学校 総括教諭）

保田 みどり 氏（県立金井高等学校 教諭）

小林 真希 氏（神奈川県PTA協議会 顧問）

濱田 啓太郎 氏（県教育委員会 教育参事監（働き方改革担当））



#### ○ 実践紹介の感想及び勤務校での取組等について

（石井 氏）

- ・ 本校でも、スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーといった外部人材の活用や出席等管理システムが導入されている。
- ・ 特に、情報教育のような専門性の高いものについて、外部人材の活用を進めており、今後、より多くの分野に拡充していきたい。
- ・ 「チーム担任制」を導入したことで、1つのクラスを複数の教員が見守る体制となっており、教材研究の負担軽減や授業の質の向上を図っている。
- ・ 学年主任の他に、低・中・高それぞれの学年団に主任を置き、グループ全体で学年を見守るようにしており、これにより適正な業務分担が図られている。

（近藤 氏）

- ・ 校務支援や欠席連絡に係るシステムについては、平塚市でも同様のシステムを導入している。  
 今後は、支払い業務についてもICT化が進めばよいと思う。
- ・ 生田高校の職員室の状況には驚いた。本校でも参考にしたいと思う。
- ・ デジタル採点システムが導入され、職員同士で教えあいながら使用している。
- ・ 平塚市全体で朝練習がなくなったこともあり、登校時間を8時15分以降に見直した。
- ・ バドミントン部に部活動指導員が配置されており、効果的に運用されている。



(保田 氏)

- ・ 本校におけるデジタル採点システムの本格的な運用はこれからであるが、今学期末の試験から使用できるよう、準備を進めている。
- ・ すでにマークシート読み取りソフトは導入しており、採点時間の短縮や採点ミスの減少に繋がっている。
- ・ 本校でも、3年前から「Teams」を活用して欠席連絡を受けるようにしている。
- ・ 職員会議をペーパーレス化し、会議資料の準備に係る時間が削減された。
- ・ 生徒が端末を持っているため、「Google Classroom」というアプリを活用し、教材や課題のやり取りを行っている。資料の印刷にかかる時間を削減でき、データが蓄積されるため、生徒自身の振り返りもしやすくなっている。

(小林 氏)

- ・ DXが進められ、先生方の負担軽減が図られることはよいことだと思うが、欠席連絡システム等の導入により、保護者とのやりとりが減ってしまうことに課題を感じている。自ら積極的に発信できない保護者や生徒にどのように対応していくのかを考える必要があるのではないか。

(濱田 氏)

- ・ 県教育委員会と地域の市町村教育委員会では、長時間勤務の是正、ウェルビーイングの向上（働きやすさと働きがいの両立）を目指した共通の目標を設定し、県は、令和7年3月に「神奈川の教員の働き方改革に関する指針」を改定した。
- ・ 指針の対象期間は令和7年度から令和11年度までの5年間で、重点改革期間に位置付けた令和9年度までの3年間に、総額約10億円の補助金を市町村教育委員会に交付する予定である。
- ・ 欠席連絡システムについては、現在、新たなシステムの導入準備を進めており、保護者と学校の双方向のやりとりができる機能を持たせたいと考えている。
- ・ オフィス環境改善については、昨年度から一部の学校で開始し、全校で進めていく予定である。



(石井 氏)

- ・ 1人1台端末が導入され、児童が日常的にタブレットを使用しているが、インターネットの通信環境が安定しないことが多く、課題の制作や資料の配付・回収に従前より時間を要している状況であるが、中・高校の現場ではどのような状況か。

(近藤 氏)

- ・ 校内に安定しない場所もあるが、そうした場所では学校が用意した小型ルーターを活用するようにしている。

(保田 氏)

- ・ 安定しているとは言えない。動画などを流すと止まってしまうことは多い。

(濱田 氏)

- ・ 子どもたちの学びを充実させることや、円滑な校務運営を進める上では、インターネットの通信環境は大変重要だと認識している。

- ・ 県立高校においては、令和6年度から令和8年度にかけて、通信速度を1Gbpsから10Gbpsにする工事を進めている。その他にも、アクセスポイントの更新・拡充も進めており、より繋がりやすい環境を目指している。

(坂野 氏)

- ・ 通信環境の整備には一定程度の時間がかかるのはやむを得ない。順次進めていってほしい。

(保田 氏)

- ・ 本校では、月2回の職員会議に加え、グループ会議や教科担当者会議なども行っているが、小・中学校ではどのような状況か。

(近藤 氏)

- ・ 本校では、2か月に1度、職員会議を行っている。
- ・ 午前中は授業、午後に職員会議を行う日を設定し、この日を定時退勤日としている。

(石井 氏)

- ・ 本校では、月1回の職員会議に加え、職員会議の前に行うグループ会議や企画会議等があるので、会議の数自体は減っていないが、事前に議題の周知をしたり、資料配付をすることで、会議時間が短縮できるよう取り組んでいる。



(坂野 氏)

- ・ 東京都では、授業期間中は会議をやらないという取組を行っている学校もある。

(小林 氏)

- ・ 会議を減らすことにより、教育の質が下がることはないのか。

(石井 氏)

- ・ 各グループのリーダーにある程度の権限を持たせており、グループ会議を以って決められることが多く、必要な場合にのみ、全体の会議や幹部に諮るようにしている。
- ・ 会議の数を減らすより、効率化という観点から、専門性の高い会議を行うことを意識している。

(近藤 氏)

- ・ 全体の会議以外の会議を月1回開催している。また、議題については、会議の準備段階でしっかり揉んでおくことを意識している。
- ・ 子どもと向き合う時間を捻出するために、限られた時間の中で済ませるように努力している。

(坂野 氏)

- ・ ICT化を進めることによって、様々な業務削減がなされている。また、会議の削減等に併せて、質が低下しないための工夫がなされている。

(小林 氏)

- ・ 業務削減を進めていただき、先生方が子どもと向き合う時間が増えればよいと思う。

(濱田 氏)

- ・ 教員だからこそできること、教員でなければできないことに集中して、子どもたちの学びを充実させていくことが重要だと思うので、今後もしっかりと取組を進めていきたい。

## ○ 働き方改革を進める上での課題等について

(保田 氏)

- ・ 部活動については課題だと思っているが、本校では当番制を導入している部活動が増えており、教員一人ひとりの負担が少なく、業務に集中できている。  
また、複数の目で生徒を見守ることに繋がっている。
- ・ 一方で、部活動指導にやりがいを持っている教員もおり、どのようにバランスをとっていくかは、今後の課題である。



(近藤 氏)

- ・ 部活動の地域展開が話題になっているが、専門的な指導のみに話が行きがちである。日々、教員が行っている部活動指導は、子どもの悩み相談や大会運営、引率等、多岐に及んでおり、こうした部分も含めて展開していく方向にはなっていないように感じる。

(石井 氏)

- ・ 勤務時間外の業務が課題だと思う。勤務時間外の削減について、見直しは進んでいるが、依然として、業務が勤務時間外に設定されていることがある。
- ・ 出勤時間が8時15分である一方、児童の登校時間が7時40分からとなっており、多くの担任が児童の登校時間に合わせて出勤している状況である。
- ・ 登校指導については、当番制ではあるが、登校中の指導となるため、7時30分頃から対応が必要となる。
- ・ また、退勤時間は16時45分となっているが、留守番電話に切り替わる時間が17時15分である。
- ・ これらのことについて、勤務時間中に行えるようにする必要があると感じている。

(坂野 氏)

- ・ 共働きの世帯も多い中、早く子どもを送り出したいという思いもあるだろう。
- ・ 子育てしやすい環境という点で、学校の状況はいかがか。

(保田 氏)

- ・ 小学校1年生と年中の子どもがいるが、とても子育てしやすい雰囲気である。
- ・ 周囲に負担をかけてしまっていると感じている一方で、自分の子どもたちに、もっと手をかけてあげたいという思いもある。

(坂野 氏)

- ・ 自分の子どもの教育と職場での指導という点で、時間のバッティングが起きる。
- ・ 学校としては、どのように保護者から理解を得ていくか考える必要がある。

(近藤 氏)

- ・ 保護者や地域に対して、学校側の取組や状況を発信していかなければいけないと思うが、DXの推進やPTAの縮小の影響を受けてか、最近では、保護者や地域とコミュニケーションをとる機会が減っていると感じる。

(石井 氏)

- ・ 教員の働き方改革について保護者や地域の理解を得るために、学校や行政から情報発信を行うことは重要であると考えます。
- ・ 今年4月に実施した懇談会において、働き方改革に係る学校の姿勢を説明したり、保護者に文書で協力依頼を配付する等、積極的に発信してきた。
- ・ 保護者の考えも聞きながら、こうした取組を積み重ねていくことが、働き方改革に繋がると思う。

(石井 氏)

- ・ 時間外の業務に関してだが、時間外に生じた子どものトラブルの対応について伺いたい。

(保田 氏)

- ・ 放課後のトラブル等でも、保護者同士で情報共有する機会があれば、解決するものもあるのではないかなと思うが、コロナ以降は保護者同士の交流の場が少なくなったと感じている。

(小林 氏)

- ・ 学校と地域と保護者の架け橋であることがPTA活動の根幹であり、この理念をPTA側がしっかり認識して、なにができるのかを考える必要がある。
- ・ 放課後のトラブルは特にSNSに関するものが多いが、学校の友人同士のトラブルであることから、保護者が学校の問題として捉えてしまうことが多い。
- ・ 保護者は、学校の外で起きているトラブルだという認識をもった上で、保護者と学校と一緒に考えていくことが重要だと思う。
- ・ また、保護者が学校に関心を持ち、保護者同士で積極的にコミュニケーションをとっていくことも重要だと思う。



## ○ 参加者との意見交換

会場及びオンラインの参加者から、意見や質問を募集した。



## 【参加者意見】部活動にやりがいを持つ教員への支援についてどう考えるか。

(近藤 氏)

- ・ 教員の情熱だけで成り立っていた部分はあると思うが、今後は変えていく必要がある。
- ・ 教員にも多様性があり、部活動をやりたい教員もいれば、そうでない教員もいるため、そこに合わせたシステムを構築していく必要がある。

(保田 氏)

- ・ 生徒と向き合うために部活をやりたいという教員もいる。また、部活動からではないと得られないものもある。
- ・ 単に業務を減らしていただくだけでは、教育活動がよくなるわけではない。
- ・ これらのバランスを図りながら働き方改革を進めていくべきである。

## ○ まとめ（以下の参加者意見への回答を含む。）

- ・ 自身の子どもの行事等と学校の業務が重複した際にどのように調整しているか。
- ・ デジタル化にはどのような利点があるか。
- ・ 各校種で特に負担になっている業務はなにか。
- ・ 教員の働き方改革を進めることで、子どもたちにどのような効果があるのか。

(石井 氏)

- ・ 今後、働き方改革が進み、職場環境がさらに良くなっていくと思う。
- ・ これまで、個人で抱えていた業務をチームで進めていければ、負担の軽減になり、自身の子どもの行事等にも参加しやすくなる。
- ・ 教員の働き方改革は、子どもの学び方の改革にも繋がっている。
- ・ 教員がゆとりをもって指導に当たることができれば、今より探究的な学び、個別最適化された指導が実現しやすくなる。

(近藤 氏)

- ・ 様々な取組が進められてきたことで、少し余裕が生まれてきたことを実感している。
- ・ 一方で、授業時間や職員数等、物理的な部分が限界にきているように感じる。
- ・ 教員がいきいきして、子どもに笑顔で接する時間を増やすためにも、働き方改革を進めていきたい。



(保田 氏)

- ・ 教員が余裕を持ち、楽しいと感じながら業務に当たれることが重要だと思う。
- ・ 教員がいきいきと働く姿を子どもたちに見せることで、子どもたちもいきいき活動できる。
- ・ 自身の子どもの行事等と業務が重複してしまった場合は、事前に予定を伝えておくことで調整はできているが、やはり周囲のサポートが必要不可欠である。
- ・ 10～15年前の環境では「子どもは持てないかな」と思っていたが、働き方が変わってきて、子育てができています。
- ・ デジタル化のメリットは様々あるが、「書く」ことの重要性も感じているので、バランスを取りながら教育効果の高いことを実践していくことが重要だと思う。

- ・ 勤務時間外にやらなければならない業務が一番負担に感じている。持ち帰ってやらざるを得ないケースもあるが、こうしたものを減らして、子どもたちとしっかり向き合えるような未来を作っていきたい。
- ・ 教員はそれぞれ一生懸命取り組んでいる。やりがいもあり、やっていてよかったと感じることも多い。課題もあるが、それぞれ楽しく業務にあたっていると思う。

(小林 氏)

- ・ 神奈川県PTA協議会では、昨年、「かながわPTA宣言」を改定し、その冒頭に「学校をひろい心でつつんで子どもたちをはぐぐもう！」と記載している。
- ・ 学校に対して度が過ぎたクレーム等があると、その対応に時間を割かれ、働き方改革が進めにくくなってしまうと考えている。
- ・ 先生方がのびのびと子どもたちと向き合い、思い切り工夫して子どもたちに教育してもらえるように、保護者は学校に対して寛容でなくてはならないと思う。
- ・ そうした指導を学校と先生方に任せ、子どもたちが自ら考えていくことを促してもらうことが、子どもたちの明るい未来に繋がっていくと考えている。

(濱田 氏)

- ・ 学校や教育委員会が、考え方や取組を積極的に発信していくことが重要だと感じた。
- ・ 子どもたちの部活動を通じた運動活動・文化的活動の機会は確保する必要がある。こうした活動を通じて人間として成長していくことができる。
- ・ 一方で、部活動の多くを教員が担っていることが、大きな負担となっている。
- ・ 今後は、この部活動を持続可能なものにしていかなければならない。
- ・ また、部活動指導にやりがいを感じている教員が、今後も関わり続けられるよう検討を進めていきたい。
- ・ 子育て等の事情がある教員も仕事を継続できるよう、柔軟な働き方の導入を進めていく。また、教員を確保していくことも重要であるため、しっかり取り組んでいく。
- ・ 県教育委員会内に「県立学校問題解決サポートダイヤル」を設置している。また、この他にも様々な取組を進めている。
- ・ 働き方改革を進めることで、教員が働きやすく、働きがいを感じながら働いてもらい、子どもたちの学びをより充実させていくことが重要である。教育の質を決して下げないよう取り組んでいく。

## ○ 司会者（高校生）の感想

(佐々木さん)

- ・ 先生の仕事は、他の職業と比較しても個人の負担が大きいイメージがあった。
- ・ 先生の長時間労働を改善するため、外部人材の活用や、デジタル採点、職員室のレイアウト変更等、仕事の効率化や環境を心機一転するような改革はとても興味深かった。



- ・ 先生の働き方改革は、授業を受ける生徒としても、とても安心できることだと感じた。

(石川さん)

- ・ 私たちにとって身近なテストの採点をデジタル化することで、先生の負担が軽減されることが分かった。また、回答を一覧形式で見れることで、生徒に不足していることがわかりやすくなると感じた。
- ・ 外部人材の活用や先生同士の情報共有がデジタル化されることで、学校全体のサポートがより強くなったと思い、安心した。
- ・ 今回、このイベントに参加したことで、先生の働いている環境や変化を知ることができた。とても興味深かった。

## ○ 総括

(坂野 氏)

- ・ 学校以外でも、長時間勤務が課題となっている民間企業は多い。教員になるかどうか迷っている方もいると思うが、民間企業に行ったとしても、働き方改革というのは付きまとうものということは知っておいてほしい。
- ・ 困ったときには周りに相談をして、解決策を見つけていくことが重要である。これから教員になりたいと考えている人は、周りに助けを求める力を身に付けてほしい。



### (4) 閉会のことば (かながわ人づくり推進ネットワーク 幹事長 高木 まさき)

閉会のことばとして、会場・オンラインともに多くの方に参加いただいたことに対する謝辞、冒頭のオープニングアトラクションに出演した大和高等学校創作舞踊部への謝辞、自らの経験や知見に基づいたわかりやすい話をいただいた登壇者及びスムーズに論議を進行いただいたコーディネーターへの謝辞があった。加えて、現在進められている取組によって、先生方の時間を作り出すことは重要であるが、これをきっかけに子どもとの関わりや授業を深めていくことが最も重要との話があった。

また、かながわ教育ビジョンに掲げた理念の実現に向け、かながわ人づくり推進ネットワークと県教育委員会とが車の両輪となって、この人づくりコラボの場を活用しながら、県民の皆様との共感、協働、連携を確かなものとしていきたいとの話があった。

